

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	BEVIの背景理論（II）：EIモデルにおける「欲求」と「自己」
Author(s)	永井, 敦
Citation	広島大学森戸国際高等教育学院紀要, 2 : 15 - 24
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/49219
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049219
Right	
Relation	



BEVI の背景理論 (II)

— EI モデルにおける「欲求」と「自己」 —

永井敦

1. はじめに

本論文は、近年、国内外の高等教育機関で、海外留学した学生の「変化」（より実務的な文脈では海外留学の「効果」）の測定ツールとして注目されている BEVI (Beliefs, Event, and Values Inventory) (BEVI, 2020) という心理測定尺度について、その背景理論を解説するものである。BEVI の背景理論は、同尺度の中心的開発者である Craig N. Shealy 博士により、EI モデルまたは EI 理論と称されており、同モデルは、大きく 3 つの要素、すなわち「信念」(Beliefs)、「欲求」(Needs)、「自己」(Self) から構成されている。永井 (2019b) では「信念」を中心的に取り上げて解説しており、本稿では、その続きとして、残りの 2 つ、つまり「欲求」と「自己」について解説を試みる。¹ 永井 (2019b) と同様に、本稿執筆にあたっては Shealy (2016) の“BELIEFS, NEEDS, AND SELF: THREE COMPONENTS OF THE EI MODEL” という論考を基礎的な文献とする。また、BEVI 関連文献で用いられている用語の定訳は存在していないことが多いため、本稿では初出時に原文の英語表現も併せて提示する。

2. EI モデルにおける「欲求」

2.1 人間の欲求に関する先行研究

人間の欲求とは何かについては、これまで多くの研究者が（主に人間の行動を理解し、説明するために）解明を試みてきた。² 例えば Hull (1943) のように食欲や性欲といった、生物的・生理的側面から欲求を捉えようとした試みや、そこに心理的な側面の分析も含めた Murray (1938)、また、生理的欲求を最下部に置き、次の段階として安全・安定の欲求、次に愛情・所属の欲求、その一つ上に承認・自尊の欲求、そして最後に自己実現の欲求を

¹ 本稿タイトルにある (II) から明らかのように、本論文は永井 (2019b) の続きという位置づけあり、同論文の議論を前提としている。EI モデルの背景理論の全体像（の概要）を理解するためにも、読者は永井 (2019b) を一読されたい。また、BEVI そのものの簡潔な解説および留学生の効果測定に関するケーススタディは永井 (2018) を、他の心理尺度と比べた場合の BEVI の特徴は永井 (2019a) を参照されたい。

² 欲求に関して、心理学内でさらなる文献を探される方のために付言しておく。一般的に、心理学において、欲求についての考察は典型的には動機づけの議論の中で行われることが多い。それは動機づけ研究では、なぜ人は、ある目標に向かって行動を始め、それを維持し続けることができるのかという問いを追求するが、欲求は、人の内部に存在し、行動を引き起こすもの（一般に動因と呼ばれる）として用いられる概念であり、動機づけ研究に重要な理論的貢献をしているためである。

置いた「欲求階層説」³を提出したことで有名な Maslow (1943) などである。より近年の研究として、「1970 年代以降における最も有力な欲求論は、Deci, E.L.と Ryan, R.M.によって提唱されている『自己決定理論』であろう」(鹿毛, 2013, p.182)。自己決定理論 (self-determination theory: SDT) (例えば Deci & Ryan, 2000) は、人間の最適な機能および動機づけに関する広範囲な理論であり、複数の下位理論から構成される。鹿毛 (2013) によると、SDT の土台となる下位理論である「基本的心理欲求理論」(basic psychological needs theory) において、人間の持つ統合的な発達と成長への傾向性の基底にあるものとして、①コンピテンスへの欲求 (need for competence : 環境と効果的に関わりながら学んでいこうとすること)、②自律性への欲求 (need for autonomy : 行為を自ら起こそうとすること)、③関係性への欲求 (need for relatedness : 他者やコミュニティと関わろうとすること) の三つの (生得的な) 欲求が仮定されている。

2.2 価値観 (Values) 研究における欲求と価値観の関係

上で見たように、欲求に関しての近年の研究は、心理学の動機づけ研究の分野で議論が行われているが、EI モデルの重要な構成要素である「信念」および「価値観」(EI モデルでは複数の信念によって構成されたもの) に関する先駆的研究においても、人間の欲求と価値観の関係について言及がなされており、そこでは信念や価値観 (繰り返しになるが、これは EI モデルではあくまで信念から構成されるもの) は、究極的には、人間の欲求から導き出されるものと考えられている。例えば Rokeach (1973) では、「価値観は欲求の認知的な表象であり、欲求を変形させたものである」(p.20) とし、個人的欲求のみだけでなく、社会的、制度的な要求 (demands) をも表象すると述べている。彼によると、欲求が価値観へと認知的に変形されることで、それが個人的に、または社会的に望ましいものとして、擁護、正当化、主張され得るようになる。そして、欲求は個人的、社会的な視点から否定されることもあるが、価値観は否定され得ないとする。それゆえに「ある人が自分の価値観について話している時、その人は間違いなく自分の欲求についても話しているのである」(p.20)。Feather (1995) は「価値観は良い悪いといった規範的判断と結びついているが、欲求にはそういった評価的判断との必然的な結びつきはない」(pp. 1135-1136) と、価値観と欲求の違いについて述べている。また、先行研究にもとづき、価値観を 10 のカテゴリーに整理・分類した Schwartz (2012) は、「これらの価値観 (のカテゴリー) は、いずれも人間存在の三つの普遍的な要件のうち一つ以上に根差しているものであるため、普遍的なものである可能性が高い...これらの要件とは生物的有機体としての個人の欲求、協調的社会的

³ 「欲求を基底的なものから上層のものまで分類」(無藤・森・遠藤・玉瀬、2018、p. 207) し、種々の欲求の間に階層関係を想定したモデルである。

的相互作用の必要性、集団の生存および繁栄の欲求である」(p.4) と述べている。特に、ここで Schwartz が述べている「協調的社会的相互作用の必要性」(requisites of coordinated social interaction) は前節で見た SDT の「関係性への欲求」と非常に近い概念であり(ただし、前者が集団のレベルに注目し、後者は個人のレベルで考えている違いはある)、EI モデルでは、両者を互いに補完するものとしてとらえている。

2.3 EI モデルによる欲求とは

以上の議論(実際には本稿で取り上げたものよりはるかに多くの文献)をふまえ、Shealy (2016) は欲求に関する先行研究において、様々な違いが、(1) 分析レベル(生理的か、心理的か)、(2) 分野・認識論的基盤(発達心理学か、社会心理学か)、(3) 理論的概念の焦点(欲求か、価値観か)、(4) 方法論(統制された実験場面か、臨床的な現場か)、(5) 用いられた証拠の基準(欲求が存在するということができる閾値のレベル)、などで見られることを指摘している。そのため、欲求という概念を EI モデルで明示するために、以下の5つの視点から、欲求を「操作的に定義」することを提案している。

- (a) 探求すべき問い (questions to be answered)
- (b) 扱うべきパラメータ (parameters to be addressed) ⁴
- (c) 欲求にもとづく理論の開発や評価において中心となる基準 (core criteria to be met in the development and evaluation of needs-based theories)
- (d) 先行研究をふまえた、欲求の包括的な「中心的欲求」の定義 (a definition of “core need” that seeks to be mindful and inclusive of the perspectives presented above)
- (e) 欲求にもとづく理論の発展にこれまで関わった理論家、臨床家、研究者の貢献をふまえた、生理的・心理的欲求の連続性 (a proposed continuum of physiological and psychological need based upon the contributions of historically and currently prominent needs-based theorists, clinicians, and researchers)

⁴ ここでいうパラメータとは実質的には規準(または方略)のことであり、どのような規準を用いれば、ある欲求がより中心的なものであるかどうかを判別できるか、という問いに答えるために設定されたものである。例えば10挙げられている規準(方略)の最初のものとして「(aで仮定された)欲求が存在する理論的インフラ/基盤(例: 自己)を明示せよ」(Articulate the theoretical infrastructure (e.g. self) in which these needs exist) が挙げられている。

これらの視点は興味深いが、その内容は、研究設問の提案から、研究方略的な内容のもの、欲求の定義の提案など、性質が異なる内容が列挙されているため、ここでは全てを取り上げることはせず、我々の関心事である、EI モデルにおける欲求とは何かという問いに答えるもの、つまり、定義の部分（上記の d）と連続性の観点（上記の e）を取り上げたい。Shealy（2016）は EI モデルにおいて、信念と価値観は人間の中心的欲求（core need）に仕えるものとして存在する（beliefs and values exist in the service of core human needs）と仮定され、中心的欲求の特徴として以下の 6 つを挙げている。

1. 生涯にわたって、人間（有機体）が中心的欲求を、自らにとって十分だと感じられる程度まで満たすために動機づけ、または駆動する（ここでの欲求は食欲、愛着、感情、承認、活性、所属、実現、調和、意識に関わるものを含む）
2. 人間の経験全体を包摂する生理的・心理的な連続体に沿う形で存在する
3. 進化的適応の歴史から派生し、それゆえに、人間の存在にとって中心的で、種としての定義的な特徴である
4. 個人によってそれぞれ異なる適応的潜在能力（adaptive potential）として表出される
5. 個人によってそれぞれ異なる発達過程や形成変数/要因（formative variables）によって表現型として形作られる
6. その存在は、非言語的な生理的・行動的指標および（または）自己や他者、世界一般に関して述べられた信念や価値など、言語的な証拠に基づいて証拠立てられる

そして Shealy（2016, p.63）は、ここで定義される人間の「中心的欲求」は、さらに以下の 9 つの相互に関連するレベルから成る連続体に沿う形で存在すると主張する。

レベル I: 食欲（Appetitive Needs）（飢え、排出、放出、安定）

レベル II: 愛着欲求（Attachment Needs）（融合、接触、温もり、絆、安全、世話、反応、予測可能性）

レベル III: 感情欲求（Affective Needs）（表情、受容、相互的共感、調整）

- レベル IV: 承認欲求 (Acknowledgment Needs) (ミラーリング/真似、認知、共鳴)
- レベル V: 活性化欲求 (Activation Needs) (刺激、新規性の探求、因果関係、学習、
効能)
- レベル VI: 所属欲求 (Affiliative Needs) (帰属意識、つながり、相互依存、関係性、
社会交流)
- レベル VII: 実現欲求 (Actualizing Needs) (潜在力、差異化、達成、影響、一貫性、
一致、統一性、尊重、アイデンティティ)
- レベル VIII: 調和欲求 (Attunement Needs) (人間的条件への調和と自然世界への調和
の2つの下次元から成り、前者には利他主義、共同体、思いやり、公
平性、正義、保護、応答性、自己と他者、正直さ、が含まれ、後者には
均衡、持続可能性、相互関連性、生物、生物システム、宇宙、が含まれ
る)
- レベル IX: 意識欲求 (Awareness Needs) (開放度/オープンさ、内省、生活の場所、
人生の目的、意味生成、存在的、死の必然、本質、有限と無限、超越、
変容/変革)

これらの欲求のレベルについて、実際に BEVI が持つ 17 のスケール⁵と見比べると、スケールの内のいくつかが、この中心的欲求と密接な関係があることがわかる。例えば BEVI スケールの 2 (欲求抑圧)、3 (欲求充足)、4 (アイデンティティ拡散) は、17 の BEVI スケールを 7 つの領域に分けた場合に、「中核的 (中心的) 欲求の充足」 (Fulfillment of Core Needs) の中に分類されている。Shealy (2016) では、これら欲求レベルや中心的欲求の定義が BEVI のどのスケールと関連しているのか明示されているわけではないが、関連性があること自体は明らかであろう。永井 (2018) では BEVI を日本語で「信念、事象、価値尺度」(同論文の注 7 参照) と仮訳しているが、信念や価値 (観) が前面に出ているため、ともすると BEVI と欲求との関連性が見えないかもしれない。しかし、上で提示してきた議論をふまえるならば、その関連性は読者には明白であろう。すなわち、価値観とは究極的には人間の欲求から導出されたもの (Rokeach の言葉を借りれば欲求の認知的表象) であり、そして EI モデルでは価値観はあくまで信念の集合体と仮定していることから、欲求はかなり根源的な意味

⁵ BEVI のスケールについては Wandschneider et al. (2016) または永井 (2018) を参照されたい。

で BEVI の理論的基盤と成っている。EI モデルにとって、欲求とは、信念（そして価値観）と並んでこれだけ重要な理論的位置を持つ概念であるが、次に問わなければならないのは、では信念や欲求はどこに（互いに密接な関係を持つ形で）実在し、どこで相互作用をするのか、ということである。可能性としては人格（personality）、こころ（mind）、魂（soul）などいくつもの「入れ物」が考えられるが、EI モデルではそれは「自己」（Self）であるとする。以下では EI モデルにおける自己について見ていく。

3 EI モデルによる「自己」

3.1 自己に関する先行研究

まず「自己」という概念は、EI モデルが新たに提出した概念ではなく、心理学（特に社会心理学、発達心理学、パーソナリティ心理学、臨床心理学）の分野においては、伝統的に重要な研究トピックの一つである（Kowalski & Leary, 1999; Leary & Tangney, 2012）。Shealy (2016) は PsycINFO という、心理学研究で最も利用されている論文データベースの一つで検索したところ、論文のタイトルに限っても、108,259 件も“self”が言及されていたと述べている。⁶ 多くの研究的蓄積がある一方、自己という概念についても、他の心理学の複雑な概念と同様に、確立された定義がなく、問題として残っている（Leary & Tangney, 2012）。Shealy (2016) は自己概念に関する既存の研究を概観し、それぞれの研究者の学問的および認識論的背景を考慮に入れ、包括的自己（Encompassing Self）、超越的自己（Transcendent Self）、（社会）構成的自己（Constructed Self）、ゲシュタルト的自己（Gestalten Self）と分類している。これらの分類からも容易に想像されるように、統一的な自己理論の提出は困難な状況であるが、Shealy (2016) はこれらの種々の自己概念について現出しつつある共通点として、「自己は包括的で、統合的な用語を用いて概念化されなければならない」（p.74）ことを指摘している。すなわち、自己概念の構成要素を具体化する場合には、それらの部分は、一貫した、相乗的な全体としてもまとめられ得るように、生態学的にも妥当な（ecologically valid）理論、つまり、研究者の共同体と実践者の共同体の、いずれからも妥当とみなされる形で理論を構成することが重要となる。

3.2 EI モデルによる自己の次元（Dimensions of Self）

⁶ ただし、これは“self-efficacy”（自己効力感）のように複合語に組み込まれているケースも含むため、すべてが自己そのものを研究としているわけではもちろんない。

Shealy (2016) は、自己概念について先行研究を整理し、包括的かつ統合的な自己の理論を構成する上で言及が必要となる定義的な要素や次元を提出している。以下は EI モデルの前提となる、自己概念の作業的定義である。

(人間の自己は)

1. 高度に複雑で相互依存的なシステムであり、種としての人間が、意識という機能（自分が存在しているということへの意識）を獲得したことの派生物である。
2. 各個人によって、主観的な（“I”）、そして客観的な（“me”）言葉で経験される。
3. 人間の経験と機能（例: 欲求、感情、思考、行動）の全ての側面を包み、組織化する。
4. どのような包括的な自己の理論において説明されなければならない、以下の、6 つの相互作用する次元から構成される（表 1 も参照）：
 - a) 形成的 (formative) = 自己の起源と発達（生得的およびまたは構成的）
 - b) 調整的 (regulatory) = 自己の機能と機構（構造およびまたは過程）
 - c) 文脈的 (contextual) = 自己が記述され、経験される分析のレベル（内的およびまたは外的）
 - d) 知覚的 (perceptual) = 自己による自身の存在、構造、機能への意識（無意識的およびまたは意識的）
 - e) 経験的 (experiential) = 自己が三次元的および経験的世界において経験されるか、超越的で霊的な世界で経験されるか（物理的およびかつ形而上的か）
 - f) 統合的 (integrative) = 自己の個別構成要素が一貫したゲシュタルト（全体）へと、どのように、そしてどの程度統合されるのか、または、そもそも統合され得るのか（部分およびまたは全体）

表 1 自己の 6 つの次元 (Shealy, 2016, p.75, Table 2.2 を参考に筆者作成)

		主観的自己 = I		客観的自己 = ME
I.	形成的:	生得的	⇔	構成的
II.	調整的:	構造	⇔	過程
III.	文脈的:	内的	⇔	外的
IV.	知覚的:	無意識的	⇔	意識的
V.	経験的:	物理的	⇔	形而上的
VI.	統合的:	部分	⇔	全体

EI モデルの自己に関しては、上記の作業的定義が基本となる。ただ、EI モデルには、ここ

⁷ 例えば Leary (2002, p. 120) は、人間が自らを注意の対象とし、意識する能力は、人間を他の動物から区別する主要な心理的特質であるかもしれないとし、この機能（能力）が、我々が自己やその類似概念を用いる際に意味しているものの中核であると述べている。

まで見てきた「信念」、「欲求」、「自己—Shealy (2016, p.81) はこれらを EI 理論の 3 つの主要な定義と呼ぶ—に加えて、「EI 自己」(EI Self) という重要な概念があるが、これについては機会を改めて解説したい。「EI 理論」(EI Theory) と EI モデル (EI Model) という言葉は、Shealy (2016) でもそこまではっきりと区別されているわけではないが、改めて図示するならば、以下のように表現されるであろう (EI 理論の 6 つの原理は以下で説明し、EI 自己の中身については別稿で解説する)。

図 1 EI モデルの概念図

EI モデル	
EI 理論	EI 自己
<ul style="list-style-type: none"> ○ 3 つの主要な定義 (Belief, Need, Self) ○ 6 つの原理 (Etiological, Mediational, Constitutive, Explicative, Resistant, Transformational) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 外的自己 (Exoself) ○ 殻自己 (Ectoself) ○ 媒介自己 (Mesoself) ○ 核自己 (Endoself)

4 EI 理論の 6 つの原理

ここまで EI 理論 (より大きくは EI モデル) における信念、欲求、自己の作業的定義が示されているが、Shealy (2016) は、EI 理論において相互に関連する 6 つの原理について以下のとおり説明している。

1. 起源的 (Etiological) : 信念と価値観はそれらが自分のものであるからと言って必ずしも正しいとか優れているわけではなく、我々が (相対的に) 良い悪い、正しい誤っていると考える信念や価値観は、(a) 適応的潜在能力 (例: 遺伝的素質)、(b) 中心的欲求 (例: 愛着、所属)、(c) 形成変数 (例: 保護者、生い立ち)、(d) 現在の偶発性 (例: 特定の時間や場所で強化されたり、されなかったりする) の相互作用によって作られたものである。
2. 媒介的 (Mediational) : 信念と価値観は個人的、社会的レベルにおいて、行動を媒介する過程 (プロセス) であり、意識できるものとできないもの (無意識的なもの) がある。また、必ずしも、合理的な、または論理的な根拠を持つものではない。
3. 構成的 (Constitutive) : 信念や価値観は特定の時間や空間を超えることはできないが、人間が世界観を構成するための能力と欲求は、人間の自己が作られる場合の派生物である。これは、信念や価値観の中身は、それらの獲得の状況でさまざまに異なり得るが、その獲得プロセス (例: 発達面、情緒面、属性面) は自己の構成的な側面によって決定されることを意味している (例: 形成的次元、調節的次元、文脈的次元、知覚的次元、経験的次元、統合的次元)。
4. 説明的 (Explicative) : 人生における重要な出来事や事象についての十分な知識と組み合わされた場合、信念や価値観の陳述は (a) 人格や自己についての仮説的な (推測される) 構造と機構について多くの情報と、(b) 幅広い状況と文脈で意味を持つ問題や現象に比較的

にアクセスしやすい入り口を提供してくれる。

5. 抵抗的 (Resistant) : 信念や価値観は変化し得るが、それらは (a) 中心的欲求 (例: 愛着、所属)、(b) 媒介的プロセス (例: 帰属、フィルター機能)、(c) 外的な偶然性 (例: 偶然に強化される)、が相互作用して形成され、人格や自己において (究極的には神経生理学的なレベルでも) 体系化されているため、簡単に修正できるものではない。
6. 変容的 (Transformational) : 人間は均衡と安定への欲求と、発達と成長に付随する不可避的な内的・外的な圧力との間でバランスを保たなければならないため、信念や価値観を変えることは、根底にある欲求にアクセスし、欲求と信念と価値観の関係性を再構成すること (つまり、自己の構造を変えること) を意味する。この、自己の構造がどのように形成されたかを理解するプロセスは、感情的に緊張し、常に意識的とは限らないような形で、自分の欲求がどうすればよりよく満たされるかを振り返る過程を必然的に含む。また、その過程を経ると自分が自己、他者、世界一般について何を信じるか、ということにも影響が出る。最終的に、信念や価値観が、どの程度変化するかについては、7つのDによる。⁸

5 おわりに

以上、EI モデル (EI 理論) の3つの主要概念、すなわち「信念」、「欲求」、「自己」の内、「欲求」と「自己」について解説を試みた。欲求の概念は、信念 (または価値観) が認知的に表象されたという Rokeach の指摘で明らかなように、両者の間には不可分の関係がある。また、信念、価値観、欲求といったものは実際にどこにあるのか、という問いに対し、EI モデルでは、6つの次元を持った「自己」こそがその器 (インフラ) であり、そこにおいて、信念や欲求が相互に依存し、作用し合う形で、組織化されているとする。

本稿では EI 理論の3つの主要な定義 (信念、欲求、自己) のうち欲求と自己を取り上げ、また、最後に、EI 理論の6つの原理について紹介した。したがって、永井 (2019b) と併せると、BEVI の背景理論である、EI モデルの半分を解説したことになる (図1参照)。なお、もう一つの重要な概念である EI 自己 (EI Self) の解説には別稿を用意する予定である。最後に、前稿と本稿の解説論文を通じて、普段実務的に

⁸ 7つのDとは介入の効果を特徴づける以下の7つの特徴を言う。長さ (duration)、差異 (difference)、深さ (depth)、決定 (determine)、デザイン (design)、実行 (deliver)、報告 (debrief)。これらについては永井 (2019b, p.17) でも簡単に紹介している。

使っている BEVI というツールの背景には、過去の膨大な研究の蓄積をふまえ、また、同時にそれらを越えていこうとする独自で野心的な視点を加えた EI モデルが存在していることが、必ずしも心理学の専門的教育を受けていない BEVI ユーザーの方にも伝えることができた信じ、本稿を終えたい。

参考文献

- Beliefs, Events, and Values Inventory. (2020). About the BEVI. Retrieved February 21, 2020, from <http://thebevi.com/about/>
- Deci, E.L., & Ryan, R.M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11 (14), 227-268.
- Feather, N.T. (1995). Values, valences, and choice: The influence of values on the perceived attractiveness and choice of alternatives. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68 (6), 1135-1151.
- Hull, C.L. (1943). *Principles of behavior: An introduction to behavior theory*. New York, NY: Appleton-Century-Crofts.
- 鹿毛雅治 (2013). 『学習意欲の理論—動機づけの教育心理学』金子書房.
- Kowalski, R.M., & Leary, M.R. (Eds.). (1999). *The social psychology of emotional and behavioral problems: Interfaces of social and clinical psychology*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Leary, M.R. (2002). When selves collide: The nature of the self and the dynamics of interpersonal relationships. In A. Tesser, D.A. Stapel, & Wood, J.V. (Eds.), *Self and motivation: Emerging psychological perspectives* (pp.119-146). Washington, DC: American Psychological Association.
- Leary, M.R., & Tangney, J.P. (2012). The self as an organizing construct in the behavioral and social sciences. In Leary, M.R., & Tangney, J.P. (Eds.), *Handbook of self and identity* (2nd ed., pp.1-8), New York, NY: The Guilford Press.
- 永井敦 (2018) 「BEVI によるショート・ビジット型留学プログラムの効果分析：「グローバル人材」は育成できるのか？」『広島大学留学生教育』第 22 号, pp.38-52.
- 永井敦 (2019a) 「BEVI と IDI の比較：その基本的特徴と妥当性に関するエビデンス」『広島大学森戸国際高等教育学院紀要』第 1 号, pp. 7-14.
- 永井敦 (2019b) 「BEVI の背景理論 (I)：EI モデルにおける「信念」と「価値観」」『広島大学留学生教育』第 23 号, pp. 9-19.
- Maslow, A. H. (1943). A theory of human motivation. *Psychological Review*, 50 (4), 370–396.
- Murray, H.A. (1938). *Explorations in personality*. New York, NY: The Guilford Press.
- Rokeach, M. (1973). *The nature of human values*. New York, NY: Free Press.
- Schwartz, S. H. (2012). An Overview of the Schwartz Theory of Basic Values. *Online Readings in Psychology and Culture*, 2 (1). Retrieved February 21, 2020, from <https://doi.org/10.9707/2307-0919.1116>
- Shealy, C. N. (2016). Beliefs, Needs, and Self: Three Components of the EI Model. In C. N. Shealy (Ed.), *Making sense of beliefs and values: Theory, research, and practice* (pp. 19-92). New York, NY, US: Springer Publishing.
- Shealy, C. N. (Ed.) (2016). *Making sense of beliefs and values*. New York: Springer Publishing.
- Wandschneider, E., Pysarchik, D. T., Sternberger, L. G., Ma, W., Acheson, K., Baltensperger, B., Good, R. T., Brubaker, B., Baldwin, T., Nishitani, H., Wang, F., Reisweber, J., & Hart, V. (2016). The forum BEVI project: Applications and implications for international, multicultural, and transformative learning. In C. N. Shealy (Ed.), *Making sense of beliefs and values: Theory, research, and practice* (pp. 407-484). New York, NY, US: Springer Publishing.